

「ソフィスト思潮」とは何か？

納富信留（慶應義塾大学）

「ソフィスト思潮」（Sophistic movement）という名称は、George Kerferd の研究書 [Kerferd 1981] の標題以来、広く通用している。前 5 世紀後半から前 4 世紀にかけての元の「ソフィスト思潮」に対して、ローマ期の弁論術興隆を「第 2 次ソフィスト思潮」（Second Sophistic）と呼ぶことも定着している [堀尾 2014]。この「思潮」を前者に即して総合的に考察し、近年の知見をまとめていきたい [納富 2008a、2014a]。特定の哲学者や主題を分析する通常の研究とは異なり、この思想動向の哲学的意義を全体として考察することが、本論の目標となる。

1、「ソフィスト」という名称の背景

「ソフィスト」（σοφιστής）という名称は、プロタゴラス（前 490–415/411 頃）が最初に職業名として使い始めたと言われている。プラトン『プロタゴラス』316d–317c がその明瞭な表明とされる。

「私は、ソフィストの技術は古いものだが、それに従事していた昔の人々は、その技術への憎悪を恐れて、仮面を身につけヴェールに隠れていたと主張する。〔中略〕だが、この私は、それらの人々とはまったく反対の道を歩んできた。つまり、自分がソフィストであること、そして人間を教育することを、公然と主張しているのだ。」(316d, 317b)

この言説の歴史性に疑問の余地なしとは言えない。一般にソフィスト思潮の復元にプラトン対話篇を用いることは、方法的に慎重であるべきである。だが、プロタゴラスを「最初のソフィスト」とする規定は、プラトン以来、ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』9.52、フィロストラトス『ソフィスト列伝』1.494.27–28、『スーダ』Π.2958 で繰り返される [納富 2007a、2013]。

“σοφιστής” というギリシア語は、ソロンやピュタゴラスにも使われることから（ヘロドトス 1.29, 2.49, 4.95）、一般には“σοφός”（知者）と同義とされている。だが、その同義性を証言するイソクラテス『アンティドシス』235 やアエリウス・アリスティデス (DK 79.1) は、ソフィストを擁護する強い意図を伴っており、実際の用例を精査すると、「ソフィスト」という語はプラトン以前に既に否定的なニュアンスを帯びていたことが判る。

まず、語源となる“σοφίζεσθαι” (n. “σοφισμα”) は、既にヘシオドス『仕事と日』649 に用例がある。この動詞は、前 6 世紀とされるテオグニス『エレゲイア』1.19、イビュコス断片 1.23 PMG でも、ムーサイの技術を指して用いられる。“σοφιστής” という名詞は、前 5 世紀にピンダロス『イストミア讃歌』5.28 が「賢い詩人」の意味で初めて使っている。

アイスキュロスに帰される『縛られたプロメテウス』ではプロメテウスが 2 度「ソフィスト」と呼ばれており(62, 944)、“σοφίζεσθαι” やその名詞形 “σόφισμα” は、技やトリックを用いる「ずる賢い知恵」を意味する。この語は、専門職業の成立以前に既に、肯定的な「知者」というよりも、一般の疑念や批判が向けられる否定的な知恵者を指していたことが見て取られる（「ずる賢さ」 *cunningness* については、Detienne & Vernant 1978 参照）。

ピンダロスの用例の他、アイスキュロス断片 314 *TrGF* やソフォクレス断片 906 *TrGF* のように、詩人や音楽家を「ソフィスト」と呼ぶことは稀ではなく、この語は諸技術の専門家にも一般的に用いられている。『プロタゴラス』でプロタゴラスは、自分以前の「ソフィスト」として音楽家アガトクレスとピュトクレイデスを含めているが(316e)、それはこの伝統を表す（彼らの弟子で、ソクラテスも音楽を習ったとされるダモンも、プルタルコス『ペリクレス伝』4 で「ソフィスト」と呼ばれている）。その箇所では、「偽装した古いソフィスト」に詩人のホメロス、ヘシオドス、シモニデス、秘儀や神託を司るオルフェウス、ムサイオス、体育教師イッコス、ヘロディコスの名も挙げられている(316d-e)。このリストで興味深いのは、先行者とされるのが各技術の「知者」であり、所謂「自然学者」（イオニアとイタリアの自然探求家）が含まれない点である。プロタゴラスの出身地アブデラは、後輩にデモクリトスを生む自然学の盛んな地であり、プロタゴラス自身も数学などに一定の知見があった。だが、プロタゴラスは「ソフィスト」が古い知恵の伝統に属していて、「自然探求」とは一線を画することを意識していたようである。

初期の用例や語法から「ソフィスト」という語が「知者」と同義ではなく、その知恵の「ずる賢さ」を含意していたことは既に示したが、その特徴はプロタゴラスが「ソフィスト」の呼称で専門職業を開始した前 5 世紀後半により顕著となる。アリストファネス『雲』（前 423 年初演）で「ソフィスト」は雲の養い子とされ(331)、ソクラテスが教える技がソフィストの代表とされる(1111, 1309-10)。また、自然学者とソフィストにまたがる形で「空中の知者」(*μετεωροσοφιστής*, 360)という語がプロディコスとソクラテスに適用されている[納富 2010b, c]。前 5 世紀後半の喜劇詩人プラトンには『ソフィストたち』という標題の作品があり、エウポリスは『追従者たち』で、登場人物のプロタゴラスを「ソフィスト」と呼んでいる(388 *PCG*)。

エウリピデスも『ヒッポリュトス』921、『ヘラクレスの子供たち』993、『救いを求める女たち』903、断片 905 *TrGF* で、言論に関わる知恵として揶揄を込めてこの語を使っている。トゥキュディデスでは、クレオンが否定的な意味で弁論の専門家をそう呼んでいる(3.38.7)。ヒッポクラテス『古い医術について』（成立年代には議論がある）20 で「ソフィスト」は医者やエンペドクレスら自然学者と並べられており、アポロニアのディオゲネスは自然学者を「ソフィスト」と呼ぶ(DK 64 A4)。だが、既にソフィストたちが活躍する前 5 世紀末でも、『両論』6.11 で言及されるソフィスト教育を除いて、この呼称が特定の職業を明瞭に指しているようには見えない。

プラトン以前に「ソフィスト」が「哲学者」(*φιλόσοφος* とその動詞形) から区別対照さ

れている例はない。ピュタゴラスが造語したとされる“*φιλόσοφος*”の語は、ヘラクレイトス断片 35 DK が初出で（私はピュタゴラスへの揶揄と解する）、前 5 世紀の用例は、ヘロドトス(1.30.11)、トゥキュディデス(2.40.1)、ゴルギアス『ヘレネ頌』14、『両論』1.1、ヒッポクラテス『古い医術について』20に限られる。また、悲劇・喜劇では前 392 年上演のアリストファネス『女の議会』571 が初出であり、きわめて稀な語であることが分かる。前 4 世紀に入るとリュシアスの弁論 8.11、[24.10]に用例があるが、前 390 年代以後はイソクラテスとプラトンが頻繁に用いるようになる（『ソフィスト論駁』“*φιλοσοφία*” 1, 11, 21 ; “*φιλοσοφείν*” 14, 18 等）。

プラトンと同時代の弁論家イソクラテスとアルキダマスは、自身がソフィストでありかつ哲学者であることを誇りながら、他のソフィストたちを批判した（アルキダマス『ソフィストについて』1, 11, 19、『オデュッセウス』60, 111）。「知者」と重なりながら批判的・揶揄的に用いられた「ソフィスト」という名称は、プロタゴラスやイソクラテスらによって肯定的・積極的に用いられたが、プラトンは「哲学者」という新しい語（ピュタゴラス派の連想が強い）を肯定的に用いて対照させた。「哲学者／ソフィスト」の峻別と対比はプラトンが導入し確立したもののだが、イソクラテスを見る限り、同時代で完全に共有されていた訳ではない〔納富 2010a〕。後者の流れはキケロによる「弁論家」評価につながり、ローマにおける「第 2 次ソフィスト思潮」の興隆をもたらす。

2、「ソフィスト」同一性の問題

古代の著述家が典型的に「ソフィスト」に含めるのは、プロタゴラス、ゴルギアス、ヒッピアス、プロディコス、ポロス、トラシュマコスら、プラトン対話篇の登場人物たちであった。DK 断片集が「古い時代のソフィスト」として収めるのも彼らである。他方、前 4 世紀前半に活躍した次世代のポリュクラテス、アルキダマス、リュコフロン、ブリュソン、イソクラテスらは主要なソフィストとして扱われず（リュコフロンのみ DK 83 に収録）、彼らの資料は「弁論家集」に収められる〔Radermacher 1951〕。第 1 世代に属する「アンティフォン」も古代の著者が言及することは稀であったが、それはプラトンが対話篇で無視したためであろう。『メネクセノス』236a でソクラテスは「ラムノス区のアンティフォン」を弁論術の教師として言及するが、それ以外での沈黙は意図的である。アテナイ出身の寡頭政治家という役割の問題かもしれない。「アンティフォン」をめぐっては「政治家／弁論家／ソフィスト／『真理について』著者」の間で人物同定に論争があるが〔Gagarin 2002 / Pendrick 2002〕、混乱の一端は、プラトン証言の欠如にあるかもしれない。後代のソフィスト理解へのプラトンの影響力を物語っている。

プラトンは「ソフィスト」を「哲学者」、とりわけその代表者ソクラテスと明瞭に対比して否定的に扱ったが、アリストファネス『雲』の揶揄に典型的に見られるように、同時代のアテナイ人たちはソクラテスを主要な「ソフィスト」と見なしていた。イソクラテスは同時代や彼以前の「ソフィストたち」を批判する際に、おそらくプラトンの思想も含め

ており、リュシ阿斯はプラトンを「ソフィスト」と呼んでいたという。また、リュシ阿斯がスフェットス区のアISKINESを告訴した時、否定的な意味で「ソフィスト」という呼称を彼に向けていた。ソクラテスの弟子の中でも、アリストIPPOSやアISKINESは授業料を取って弁論術等を教えており、「ソフィスト」と呼ばれ、本人たちもそれを受け入れていた [納富 2010a]。概して、プラトンを除くソクラテスの弟子たちは「ソフィスト／哲学者」の区別をほとんど意識していなかった (クセノフォン『ソクラテスの思い出』 1.6、『狩獵論』 13 が例外だが、プラトンの影響とも推測される)。この区別には、プラトンによる他のソクラテスの弟子たちへの批判も込められていたはずである [納富 2005]。

プラトン『メノン』によれば、ゴルギアス自身は「徳の教育」にあたっていないという理由から、自分は「ソフィスト」ではないと主張していた (DK 82 A21)。だが、すでにプラトンの他の対話篇で彼はソフィストのリストに含められており、フィロストラトス『ソフィスト列伝』では「ソフィスト術の父」と呼ばれる。本人による名称使用という事実は、単純にソフィストを一つのグループにまとめる安全な基準とはなりえない。

「ソフィスト」と呼ばれる思想家たちはそれぞれ全く異なる活動や思想に従事し、時に正反対の特徴を示すことから、彼らを一団に扱うことに慎重、あるいは反対する研究者も少なくない。ソフィストが扱う主題は、数学や自然科学から倫理、法律、政治、心理、宗教、歴史、言語学、弁論術、文芸論まで多岐に渉る。彼らは統一した思想信条や共通基盤を持たず、学校や学派を形成せずに、むしろ、対抗意識から相互に批判と差別化を主張していた。プラトン『プロタゴラス』は、当代の 3 大ソフィスト、プロタゴラス、ヒッピアス、プロディオコスが聴衆の前で互いに揶揄や批判的コメントを交わす様子を生き生きと描いている。この対抗関係や敵対関係が、ソフィスト活動の顕著な特徴をなす。それぞれのソフィストは他のソフィストと異なることを強調し、自身こそ優れた思想家や教育者であり、真正のソフィストであって、他の連中は役立たずの偽者であると批判したのである。この特徴もまた、ソフィストたちを一つのグループとして扱うことを難しくしている。「ソフィスト」が一つの本質で捉えられるか否かは、優れて哲学的な問題である。

これゆえ、ギリシア語の「ソフィスト」は、他の思想家たちを批判する単なる レッテル に過ぎないのではないかと危惧もある。例えば、法廷等で相手を攻撃する際に用いられた「告訴常習者」(*συκοφάντης*) という呼称が、対応する実体 (職業人) を持たなかったことが、歴史学で明らかにされている。「ソフィスト」も、特定の人や思想・活動を指すというより、非難攻撃のたびに敵に貼られるレッテルであった可能性もある。この名称が同様に空虚なレッテルであれば、哲学史において特定の人物やグループを「思潮」として取りあげることが出来ない。だが、哲学者とソフィストを峻別したプラトンは、「ソフィスト」という名称に対応する実体が存在したと考えている。その場合、何がソフィストの本質をなすのか、哲学者とどう異なるのか、検討する必要がある。

プラトンは後期対話篇『ソフィスト』でこの問題に立ち返り、「ソフィスト」に複数の規定を与えた [納富 2002、2006]。(1) 徳を教えると公言する。(2) 裕福な若者を捉え、

生徒にする（若者の狩り）。(3) 教育のために授業料（金銭）を取る。(4) ギリシア各地を旅し、一所に定着しない。(5) 語りの技術（欺きも含む）を演示、教育する。(6) 特定分野の専門ではなく、多くの主題に知がある（博識、*πολυμαθία*）。これらの考察の結果、「知者を（見かけだけ）真似る者」という最終定義が与えられる。アリストテレスは『ソフィスト的論駁について』でこの定義をそのまま受け入れ、ソフィストとは「本当のでない、見かけの知恵で金銭を作る者」（1.165a22–23）と規定しており [納富 2014c]、哲学史では以後「ソフィスト」の否定的イメージが定着する（但し、前節で示したように、ソフィストを評価する別の流れもあった）。

このうち第 3 の特徴である「金銭の受取」が、ソフィストをソクラテスから明瞭に区別する徴表となる [Blank 1985]。それはソフィストの教育の専門性（プロフェッショナリズム）を表すからである。それ以前の知識人たちは各ポリスの市民として、報酬を受け取ることなく自由に思索を展開・表現していた。これに対して、アテネなどのポリス市民から高額授業料を得ることで技術や知識を授けるソフィストの登場は、社会に大きな衝撃を与えた [de Romilly 1992]。金銭を取って知識を授けることは、知識や教育を社会に流通する経済価値に還元して、その基準で計ることを意味する [Nightingale 1995: ch. 1]。知的営みの独立性、経済価値への非還元性を強調するプラトンは、そこに職業知識人としてのソフィストの問題性を見ていた。これが「学識の販売業者」と規定する『プロタゴラス』『ソフィスト』での批判の核心にある。

金銭受取という規定を基本に据えると、「ソフィスト」の範囲が明瞭になる。まず、ゴルギアスは本人の主張に拘らずこのグループに入る。リュシ阿斯は言論を制作していたが教育に当たっておらず、「弁論家」ではあっても「ソフィスト」ではない。また、カリクレス（『ゴルギアス』の登場人物）、クリティアスらは思想上の共通性は持つにしても、職業的な教育者としてのソフィストにはあたらない [納富 1998、2000、2001]。トゥキュディデスやエウリピデスらも同様である。他方で、「ソフィスト思潮」を総合的に検討する際には、こうしたソフィスト影響下にあった知識人たちの思想も考慮に入れる必要がある。

3、ソフィスト資料の問題

ソフィスト思潮の検討にあたって大きな問題となるのは、「資料」の性格である。初期ソフィストについては同時代に、プラトン、クセノフォン、イソクラテス、そしてアリストテレスの証言がある。プラトンが「哲学者」との対比で「ソフィスト」を厳しく批判し、その低評価・無視に大きな影響を与えていることは既に論じたが、イソクラテスらは別の評価を与えている。

ローマ期の著作では、ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』が「プロタゴラス伝」を収め [納富 2007a]、フィロストラトス『ソフィスト列伝』にゴルギアス、プロタゴラス、ヒッピアス、クリティアスの証言がある。また、セクストス・エンペイリコスがプロタゴラス、ゴルギアス『ないについて』を論じている。ハリカルナッソスのディオニュー

シオスは弁論スタイルの検討で、ゴルギアス、トラシュマコスに言及する。ハルポクラティオン、ポルクスの古辞典は、クリティアス、アンティフォンの語彙を収録する。彼らは「哲学者／ソフィスト／弁論家」という別の系譜で扱われており、プロタゴラスだけは両者の代表と扱われている。ソフィスト思潮の検討にあたっては、個別の資料とその文脈、系譜を慎重に見ていく必要がある。

前 5 世紀に執筆されたと推定されるソフィスト自身の著作では、ゴルギアス『ヘレネ頌』『パラメデスの弁明』『ないについて』(2種の梗概) [Buchheim 1989, 納富 2006]、ソフィスト的論考『両論』 [Robinson 1979]、イアンブリコス所収のソフィスト的論考‘Anonymous Iamblich’が残されており、アンティフォンの模擬弁論作品を含めることもできるかもしれない [高島 2002]。プロタゴラスがいくつかの著作を公刊したことは、ディオゲネス・ラエルティオスらの証言から明らかだが、その断片はほとんど残っておらず、著作の規模と内容を推量する材料は少ない。他方、ソフィストのアンティフォンの著作として標題が伝えられていた『真理について』のかなり大きな断片がエジプトの砂漠からパピルス断片として発見され、その重要な内容が明らかになっている [Decleva Caizzi & Bastianini 1989 ; Pendrick 2002 ; 納富 2008a]。

この資料の少なさは、ソフィストに対して決定的に不利な状況を作り出している [納富 2006]。だが、歴史において彼らの著作が無視され失われていった割合にも増して、彼らの活動がプラトンやイソクラテスらのような「書物」を中心に組み立てられておらず、聴衆を前にした弁論の演示や口頭での教育が中心であったことが大きな原因であったと推定される。ゴルギアスやアルキダマスが残した著作は、活動の補助的な素材に過ぎなかった。プロタゴラスの著作『神々について』『真理』も、人前で読み上げられる演示言論であり、書物として独立に流布した程度は不明である。

それら残された著述や証言は、ディールス・クランツ編『ソクラテス以前の哲学者断片集』に「古いソフィストたち」という独立部で収録されている。しかし、そこに収録された人物や「断片・証言」の範囲は限られており、DK 以後、Untersteiner 1961-62 / 1967 以外にまとまった断片集は出ていない。Graham 2010 が『初期ギリシア哲学資料集』の第 2 部としてプロタゴラス、ゴルギアス、アンティフォン、プロディコス、イアンブリコス所収ソフィスト、『両論』を収めているが、包括的な扱いではない。他方で、個別ソフィストについては、ゴルギアス [Buchheim 1989]、アンティフォン [Pendrick 2002, 高島 2011]、プロディコス [Mayhew 2011]、ヒッピアス [Patzner 1986, cf. 納富 2014b] といった断片集成で、より包括的な研究が進んでいる。

だが、最重要ソフィストのプロタゴラスにはまだ決定版がない。DK 所収の 50 程の資料に対して Capizzi 1955 が 40 を加えて若干の改善が見られたが、本格的な証言集の編纂が私とライデン大学との共同研究の途上である [Sources of Protagoras, Leiden University]。DK 断片集が思想復元の基本となる資料を選択していたのに対して、近年の資料集はより包括的な扱いを試みており、私の調査でビザンツまでのプロタゴラス証言は 330 程になっている

る。内容の重複や信頼性の程度に問題があるにしても、この主要ソフィストがどのように解釈され影響を与えたかを知るためには、そのような包括的な資料集成が必要であろう。

プロタゴラスには膨大な言及や証言があるにも拘らず、真正断片と見なされるものは極めて少ない。『真理』の冒頭にあった有名な「人間尺度説」(B1)には安定した言及があるが、その伝統はプラトン『テアイテトス』、そしてアリストテレス『形而上学』Γ巻の繰り返しに見える〔納富 2013〕。他方で、『神々について』冒頭の B4 はディールスによる合成復元であり、元になる 18 の証言(ディールスはその一部しか用いていない)は相互に異なっている。私自身の復元案は次の通りである〔納富 2008b〕。

περὶ μὲν θεῶν οὐκ ἔχω εἶδέναι οὔθ' ὡς εἰσὶν οὔθ' ὡς οὐκ εἰσὶν οὔθ' ὁποῖοί τινες ἰδέαν· πολλὰ γὰρ τὰ κωλύοντά με ἕκαστον τούτων εἶδέναι, ἢ τ' ἀδηλόγητος καὶ βραχὺς ὢν ὁ βίος τοῦ ἀνθρώπου.

「神々について私は、あるとも、ないとも、姿形がどのようなものであるかも、知ることができない。これらの各々を私が知るには障害が多いから。その不明瞭さや、人間の生が短いこと。」

これらから、プロタゴラスの原著作が早い時期に失われ、人々が間接的に記憶で引用・言及を重ねて行ったことが分かる。その際に、プラトンとアリストテレスの資料は大きな役割を果たしているが、それ以外の系譜(エピクロス派など)も重要である〔納富 2013〕。

4、ソフィストの「挑戦」

「ソフィスト思潮」に共通の思想や傾向はあるのか。確かに、多くのソフィストは「ノモス/フュシス」の対比に関わっており、それが顕著な特徴をなしている。だが、ソフィストたちは互いに異なる主張を繰り返しており、共有される教説は見られない。むしろソフィストは、(1) 伝統的価値観への批判、(2) 言論への関心、(3) 市民教育といった態度において、緩やかに方向性を共有していると言える。

(1) 伝統的な神々への見方には、詩人クセノファネスがすでに厳しい批判を加えていたが、プロタゴラスは『神々について』で神の不可知論を語り、プロディコスやクリティアスらはその起源について根本的な問題提起した。プロディコスによれば、伝統的に神々として崇拝されているものは、人間によって有益な文物や優れた人物を神格化した姿に過ぎない〔納富 2010b、2010c、Mayhew 2011〕。また、クリティアスに帰せられる悲劇『シシュポス』の登場人物は、神々は人間を統制するためにでっち上げられた仕組みだと主張する。これらの宗教・神話批判は、権威の解体と新たな価値の創出をもたらすと同時に、ソフィストへの反発を生み出した。一方で、アリストファネスが『雲』で揶揄したように人々の保守的な反発があり、他方で、プラトンは「万物の尺度は神である」として本格的な哲学から対決した。伝統批判と価値観の多様化は、プロタゴラスの相対主義を基盤にする時、哲学内部の思想対立ではなく、絶対的な「哲学」の成立可能性をめぐる根本的な争いとなる〔納富 2006、2013〕。この大きな枠組みには、19世紀後半にはニーチェがソフィストに近い立場をとってソクラテス・プラトンの道徳を批判したことで、現代にも新たな生命を

吹き込んでいる。

(2) ソフィストが大きく共有する関心は、それまでの初期ギリシア哲学者が探求していた自然や存在や始源ではなく、人間や文明の起源（プロタゴラス、プロディオコス）、歴史や記録（ヒッピアス）、言論の技法（ゴルギアス、トラシュマコス）、法律（アンティフォン）に向けられている。この特徴は、ギリシア哲学史に異質な要素、イオニア由来の自然哲学とは別の系譜に属する「知恵」に由来する。それは、プロタゴラスが『プロタゴラス』で語る「偽装したソフィスト」の系譜と関係する。他方で、自然哲学とソフィスト思潮の区別も絶対的ではない。アナクサゴラス自然学は「無神論」の基盤として、ソフィスト思潮に結びつけられてきた（プラトン『ソクラテスの弁明』26D-E）。また、ソクラテスの師ともされるアルケラオスは自然学者であったが、「ノモス／フュシス」の対比を導入した一人とも目される（DL II.16）。社会相対的な価値観を広めた歴史家ヘロドトスは、イオニア自然学の系統にある。エンペドクレスが弁論術の祖とされる点も想起される。ヒッポクラテス文書にソフィスト思潮の影響も大きい（「ノモスとフュシス」については、Heinimann 1945、納富 2008a 参照）。

この別の伝統、とりわけ詩人や弁論術との関係は、ソフィストの「言論」（ロゴス）への共通する関心を説明する。無論ここには前 5 世紀アテナイ等での民主政の確立という背景があり、とりわけ、法廷弁論の機会が決定的に重要であった。他方で、プロタゴラスら自らの思潮の起源をホメロスら古い詩人に求めることは、弁論や言論の伝統を考える上で示唆的である。自然や存在そのものを対象とするのではなく、それを扱う思考や「ロゴス」そのものを反省することは、哲学を新たな段階に進める役割を果たす。人間に知識や真理は可能であるかという認識論（懐疑論）の問題は、クセノファネスやパルメニデスにも見られ、その背景には神の認識と人間の限界を峻別するホメロス以来の人間観もあるが、「ロゴス」自体の機能や限界が明確に意識されていない。例えば、パルメニデスの女神は真理を語り、それをロゴスで吟味するように促すが（DK 28 B7）、その「ロゴス」そのものの資格は問われていない。それを問題化する視点を導入したのがソフィストたちである。

彼らの言語への関心は、「弁論術」という言論の実践的使用だけでなく、言語の仕組みとしての論理や文法に及ぶ。プロタゴラスは言葉の性（男性・女性・中性）や動詞の時制（DL 9.52）や法（祈願、質問、応答、命令：DL 9.53）を区別したと言われる。それは弁論術に直接有用なものではないことから、彼らの関心が単に実践や効用だけに向けられていなかった様子が分かる。プロディオコスによる語義区別や「正しい言葉遣い」（ὀρθόεπεια）、プロタゴラスの「正しい言論」（ὀρθὸς λόγος）は、プラトン『クラテュロス』の言語論にもつながる。

ソフィストが乱用したと批判される「詭弁」は、エレア派のゼノンのパラドクスや二分法、仮説論法などを駆使することで成立する。それは悪用されれば混乱と欺きをもたらすが、言語機能、とりわけ論理の問題点と仕組みを照らし出す役割も果たす。とりわけゴルギアス『ないについて』は「枚挙論法、重層論法」を使って「逆説」を語ることで、意図

的に「哲学・論理／ソフィスト・弁論」の境界線を越境し、問題化したと言える〔納富 2006、2012〕。プラトン『エウテュデモス』や『ソフィスト』に始まるソフィスト論理への批判は、アリストテレス『ソフィスト的論駁について』で計 13 種の誤謬分類として完成する。それは一方でアリストテレスの論理学の基盤となり、他方で現代に至る「非形式論理学」（インフォーマル・ロジック）につながる〔納富 2014c〕。

(3) 最後に、ソフィストはそういった伝統的価値観への批判的議論を、自覚的に一般の人々に広く教授した。ソフィストが教育を専門とする職業的知識人であったことは、彼らが積極的に知識を広めたことを意味する。初期ギリシアの思想家たちが、おそらく一部の上流社会層の知識人の間だけで交流を行っていたのとは異なり、ソフィストは知識を一般に解放し流布させることに重要な役割を果たした。プラトンはソフィストを「学識の流通業者」と揶揄したが、それは文明の発展と普及、ひいては哲学そのものの展開に重要な意義を果たした。初期のソフィストたちはその都度募った弟子たちに授業する教育者であったが、特定の場所と施設をそなえた恒常的な「学校」は、イソクラテスとプラトンという次世代がアテナイに導入して、哲学と教育の形を作り出す。それも広くはソフィスト思潮の遺産と言えるかもしれない。

ソフィスト思潮は、一定の思想や教義の内容としてではなく、知に対する「挑戦」の姿勢とその（時に過剰な）挑発性において、哲学そのものの存立を促し、それを揺るがす意義を持ち続けている。

【参考文献（1）：主要研究】

- Blank, D. L. (1985) 'Socratics versus sophists on payment for teaching', *Classical Antiquity* 4, 1-49.
- Buchheim, T. (1989) *Gorgias von Leontinoi, Reden, Fragmente und Testimonien*, Hamburg: Felix Meiner.
- Capizzi, A. (1955) *Protagora, Le Testimonianze e I Frammenti, edizione riveduta e ampliata con uno studio su la vita, le opere, il pensiero e la fortuna*, Firenze: G.C. Sansoni.
- Decleva Caizzi, F. et Bastianini, G. (1989) "Antipho", *Corpus dei Papyri Filosofici Greci e Latini* I.I*, Firenze: L.S. Olschki, 176-236.
- Detienne, M & Vernant, J.-P. (1978) *Cunning Intelligence in Greek Culture and Society*, trans. J. Lloyd, Sussex: Harvester Press.
- Diels, H. and Kranz, W. (1952) *Die Fragmente der Vorsokratiker* II, 6. Aufl., Dublin / Zürich: Weidmann (1. Aufl. 1903).
- Gagarin, M. (2002) *Antiphon the Athenian: oratory, law, and justice in the age of the Sophists*, Austin: University of Texas Press.
- Graham, D. (2010) *The Texts of Early Greek Philosophy: the complete fragments and selected testimonies of the major Presocratics*, 2 Parts, Cambridge: Cambridge University Press.
- Guthrie, W. K. C. (1969 / 1971) *A History of Greek Philosophy III: the fifth-century enlightenment*,

- Cambridge: Cambridge University Press; repr. Part 1, *The Sophists*, Cambridge: Cambridge University Press, 1971.
- Heinmann, F. (1945) *Nomos und Physis*, Basel: F. Reinhardt ; 『ノモスとピュシス : ギリシア思想におけるその起源と意味』、廣川洋一他訳、みすず書房、1983 年。
- 堀尾耕一 (2014) 「哲学的弁論術と第二のソフィスト術」、『ギリシャ哲学セミナー論集』 XI、1-15.
- Kerferd, G.B. (1981) *The Sophistic Movement*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mayhew, R. (2011), *Prodicus the Sophist: texts, translations, and commentary*, Oxford: Oxford University Press.
- Nightingale, A. W. (1995) *Genres in Dialogue: Plato and the construct of philosophy*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Patzer, A. (1986) *Der Sophist Hippias als Philosophiehistoriker*, Freiburg und München: Verlag Karl Alber.
- Pendrick, G. J. (2002) *Antiphon the Sophist: the fragments*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Romilly, J. de (1992) *The Great Sophists in Periclean Athens*, trans. J. Lloyd, Oxford: Oxford University Press.
- Robinson, T. M. (1979) *Contrasting Arguments: an edition of the Dissoi Logoi*, New York: Arno Press.
- Radermacher, L. (1951) *Artium Scriptores (Reste der voraristotelischen Rhetorik)*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, 227/3, Wien: Rudolf M. Rohrer.
- 高島純夫 (2002) 『アンティポーン／アンドキデス 弁論集』、京都大学学術出版会。
- 高島純夫 (2011) 『アンティフォンとその時代 前 5 世紀アテナイの社会・思想・人間』、東海大学出版会。
- Untersteiner, M. (1961-2 / 1967) *Sofisti, Testimonianze e Frammenti*, 4 vols., Firenze: La Nuova Italia.
- 【参考文献 (2) : 関連拙稿】
- (1998) 「クリティアス —プラトン政治哲学の原点—」、『西洋古典学研究』 46 (日本西洋古典学会)、44-55.
- (2000) ‘Critias and the origin of Plato’s political philosophy’, *Plato: Euthydemus, Lysis, Charmides*, T. M. Robinson & L. Brisson (eds.), Sankt Augustin: Academia Verlag, 237-250.
- (2001) 「ソフィストをめぐる哲学史の屈折」、ピロストラトス他『哲学者・ソフィスト列伝』月報 (西洋古典叢書)、京都大学学術出版会、1-4.
- (2002) 『ソフィストと哲学者の間 —プラトン『ソフィスト』を読む—』、名古屋大学出版会 : 原著、*The Unity of Plato’s Sophist: between the sophist and the philosopher*, Cambridge:

- Cambridge University Press, 1999.
- (2005) 『哲学者の誕生 —ソクラテスをめぐる人々—』、ちくま新書。
- (2006) 『ソフィストとは誰か?』、人文書院。
- (2007a) 「プロタゴラス伝註解 —古代哲学資料研究序説—」、『フィロロギカ』2、15-30。
- (2007b) ‘Plato’s critique of Gorgias: power, the other, and truth’, *Gorgias-Menon*, M. Erler & L. Brisson (eds.), Sankt Augustin: Academia Verlag, 57-61.
- (2008a) 「ソフィスト思潮」、『哲学の歴史1 哲学誕生【古代 I】 始まりとしてのギリシア』(内山勝利編)、中央公論新社、245-301。
- (2008b) 「プロタゴラス『神々について』断片と伝承」、『フィロロギカ』3、24-47。
- (2010a) ‘Socrates versus Sophists: Plato’s invention?’, *Socratica 2008, Studies in Ancient Socratic Literature*, L. Rossetti & A. Stavru (eds.), Bari: Levante Editori, 71-88.
- (2010b) ‘Prodicus in Aristophanes’, *Il Quinto Secolo: studi di filosofia antica in onore di Livio Rossetti*, Perugia: Aguaplano, 655-663.
- (2010c) 「アリストファネスのプロディコス —喜劇における思想の揶揄への覚え書—」、『西洋古典学の明日へ —逸身喜一郎教授退職記念論文集—』(大芝芳弘、小池登編)、知泉書館、191-200。
- (2012) ‘Gorgias’ use of logic and rhetoric’, *Papers on Rhetoric XI*, L. Montefusco (ed.), Università degli studi di Bolognoli, 190-199.
- (2013) ‘A protagonist of the Sophistic Movement?: Protagoras in historiography’, *Protagoras: The Man, His Measure*, J. M. van Ophuijsen, M. van Raalte & P. Stork (eds.), Leiden: Brill, 11-36.
- (2014a) ‘Sophists’, *Routledge Companion to Ancient Philosophy*, J. Warren & F. Sheffield (eds.), New York: Routledge, 94-110.
- (2014b) ‘Citations in Plato, Symposium 178B-C’, *Studi Classici e Orientali 59*, Pisa: Pisa University Press, 55-69.
- (2014c) アリストテレス『ソフィスト的論駁について』訳・解説、『アリストテレス全集3』、岩波書店。

【後記】

本論考は、2013年9月15日に東洋英和女学院大学で開催された「第17回ギリシャ哲学セミナー」での報告に基づく。研究会では司会の栗原裕次氏はじめ、神崎繁、三嶋輝夫、山本巍、山口義久、荻原理、田中享英、山本建郎、中畑正志、和泉ちえ、今井知正の各氏からご質問いただいた。また、その前後にも多くの方々から内容へのコメントをいただいた。心より感謝申し上げたい。それらを活かして本文の記述に反映させたつもりであるが、今後に残った課題も多い。ソフィスト研究が今後、日本で進展することを期待している。